



松限 洋

京都工芸繊維大学教授

横文彦氏が日本建築家協会
の機関誌「J-I-A-N-E
WS」295号に寄稿した
「新国立競技場案を神宮外
苑の歴史的文脈の中で考
える」が大きな反響を呼んで
いる。新国立競技場とは、
2020年のオリンピック
招致を目標に現在の国立競
技場を周辺敷地も含めて全
面的に再開発し、そこに8
万人収容の全土俵型の競技
場を建設するという壮大な
プロジェクトだ。総工費は
1300億円になるとい
う。2012年7月に国際
コンペが行われ、イギリス
のザハ・ハジドの斬新な
提案が最優秀に選ばれた。
横氏は、計画地の一角を

占める東京体育館(199
0年)の設計経験を踏まえ
て、このプロジェクトがも
つ危うさに疑義を唱えてい
る。その明晰な論理に誰も
が立ち止まって考えさせら
れるに違いない。むしろ、
憂慮すべきは、横氏の問題
提起によって、この重大
さが初めて可視化されたこ
とだと思ふ。私自身も全く
理解していなかった。

ここでどうしても書き留
めておきたいことがある。
それは、同じ議論が、今か
ら76年もの1937年、
1940年に開催予定だっ
た第12回オリンピック東京
大会の敷地選定をめぐるこ
も激しく交わされていたと
いう歴史的事実である。

「絵画館あたりの風致を
考えてみる。(中略)競技
場は絵画館とはかなり接近
している。而も地上数十尺
の高さにスタンドが膨大な
姿で建ちほだかった場合、
如何に建築的の意匠に手廻
を揮っても、スケールの不
調和という点であの辺り一
帯の今の調和した風致美と
いつもは跡方もなく損じ
去られるであろう。(中略)
今の神宮外苑競技場はあれ
はあれとして、まとまった
もので、今日の競技技術の
上から非難あるにせよ、永
い間神宮大会競技場として
よく明治天皇の大御心に副
い奉り得た由緒深い競技場

である。それを跡方もなく
オリンピック16日間のため
に壊し去るということは言
語道断の計画で、神宮外苑
主張唯一の理由である神宮
奉養という願望に替るごと
きだしい暴挙と言つべきで
ある。」(『建築雑誌』1
937年5月号)

この岸田の決然とした主
張は受け入れられ、最終的
な候補地は、その土壇場に
「こんどの計画でも、主
競技場をなんとか10万人収
容の線に近づけよう」と二
方のスタンドを大きく張出す
して拡張させたが、その最
上部は外苑内の道路の上に
大きくおおいかがざるよう
なことになるってしまった。
それほどこの敷地はせま
いのである。」(『新建築』
1964年10月号)

一 建築家の投げかけた問いの重さ

所 論 諸 論

日本で初めてのオリンピ
ック開催という大きな課題
の前に、競技場をどこに建
設するのか、議論は割れて
いた。そんな中、1936
年のベルリンオリンピック
を視察し、その議論をリ
ードした東京帝国大学教授の
岸田日出夫は、代々木練兵
場を最有力候補地として挙
げる。そして、その提案が
陸軍の強い反対によって撤
回を余儀なくされ、神宮外

如何に建築的の意匠に手廻
を揮っても、スケールの不
調和という点であの辺り一
帯の今の調和した風致美と
いつもは跡方もなく損じ
去られるであろう。(中略)
今の神宮外苑競技場はあれ
はあれとして、まとまった
もので、今日の競技技術の
上から非難あるにせよ、永
い間神宮大会競技場として
よく明治天皇の大御心に副
い奉り得た由緒深い競技場

なつて駒沢ゴルフ場の跡地
に落着く。そして、周知
のよつに、結局、この大会
は、直後に始まった泥沼の
日中戦争によって、「幻の
オリンピック」となったが、
戦後の1964年、岸田は、
改めて代々木練兵場の跡地
に丹下健三の設計による圓
立屋内総合競技場の実現を
果たしたのである。それでも、
この東京オリンピックに合
わせて客席を増設された神

「ここにるのは、先人た
ちが関東大震災や東京大空
襲を乗り越えたと守り育て
きた環境への敬意だったの
だと思ふ。あまにも唐突
に立案された今回の新国立
競技場計画は、こうした歴
史的文脈を踏まえたものな
のだろうか。招致決定とい
う祝祭ムード一色の中で、
一建築家の投げかけた問い
はむしろその重さを増して
おり、私たちの肩識と過去
と未来への建築的想像力が
試されている。」